MJ Audio Brand Around

第9回

MJオーディオブランド・アラウンド

クリークオーディオ

井上千岳 INOUE Chitake

コンパクトなブリティッシュスタイルの機器

クリークオーディオは1981年に設立された英国のブランドで，現在まで終始一貫ブリティッシュスタイルを通してきたことでも知られている．

最初の製品は1982年に発表されたプリメインアンプCAS4040だが，創設者のマイク・クリーク（Michel Creek）は，それまでにすでに長いキャリアを積んでいた．

マイクの父親はウィンザーレコーディング株式会社という企業を経営し，低価格なオープンテープレコーダーやカセットデッキ，FM/AMラジオなどを製造していた．マイクは1970年から6年ほどここに勤め，在庫管理から始めて，購買，生産管理，さらには設計まで学んだようだ．

ちなみに，後年開発した念願のアナログプレーヤーにWyndsorと名付けたのは，父親とその会社へのオマージュであると言う．

1976年に独立して，MRクリークという下位社を立ち上げる．主にオーディオメーカーを対象とした設計コンサルティングを業務としていたが，時には売買に関して助言を行うこともあったようだ．

それからの5年間は必ずしも順調とばかりはいかなかったようだが，それでも1981年には自身の設計による製品を生産する体制が整っていた．社名もクリークオーディオシステムとした．

こうして1982年に発表された初の製品CAS4040は出力30Wのシンプルなプリメインアンプだったが，そこには父親の会社であるウィンザーレコーディングのポリシーがそのまま引き継がれていた．すなわち低価格でハイクオリティ．このポリシーは，いまに至るまで変わっていない．

ところで，このアンプの価格は99ポンド．当時の為替レートで計算すると43,000円ほどになるが，現在ならもっと安くなるわけだ．出展したオーディオショーでも注目の的となったが，当時イギリスで最も売れていたのは，NADの3020だったという．またアーカムなど，すでに定評を得ていたメーカーも少なくはなく，コンペティターが多いなかでの出発であった．

続いてペアとなるチューナーCAS3040も発売され，受注は次第に増加する．自宅ガレージでは手狭になり，新たに工場と契約業者を確保して生産性を高めていった．1985年までにCAS4040は月産1200台，CAS3040は350台に達したという．上級機も発売され，業績は順調に伸びていった．

おもしろいことに，それから3年後の1988年，スピーカーのモダンショートから買い取りの申し入れがあった．モダンショートはその前年にグッドマン&タンノイのTGIグループに入っていたが，そのビジネスを広げるためにエレクトロニクス部門が欲しかったようだ．

マイクはこの申し入れに同意し，以後3年間チーフエンジニアとして同社で働いている．この間に4040のリファインや上級機，クリークとして初めてのCD

クリーク初の製品である
CAS4040プリメインアンプ

父の会社ウィンザーレコーディングにちなんだアナログプレーヤー，Wyndsor

多機能フォノEQアンプの
Wyndsor phono

コンパクトな
OBHシリーズの
ヘッドフォンアンプ
OBH-21mk2

QUADに代表される英国流のオーディオ機器は，コンパクトでスタイリッシュ，扱いやすくも音楽を本格的に再生する．今回紹介するクリークオーディオもその流れを汲み，スリムながら強力な電源部を搭載して，瞬時電流供給能力の高いアンプ群を発表している．またスリムな筐体に，チューナーやDAC，ブルートゥースなど多くの機能を詰め込むのも，英国流といえよう．

●資料請求先
株式会社ハイ・ファイ・ジャパン
MJ10係
〒102-0075　東京都千代田区三番町1-8
TEL 03-3288-5231
http://www.hifijapan.co.jp/

プレーヤーなどが開発された．

契約が終了した1991年，マイクはEMFオーディオという会社を設立し，それまでよりやや高額な製品を作るようになった．このため新しい市場として，ヨーロッパや極東地域が開拓された．そして1993年TGIがクリークオーディオの売却を決めると，マイクは3人のパートナーとともにこれを買い取り，新しくクリークオーディオという会社を設立する．これが現在のクリーク社である．

生産量の増加で設備を次々に移転

この後，クリークは大きな発展の時期を迎える．まず1995年には米国の代理店であるミュージックホールから，低価格なレコードプレーヤーに合わせたコンパクトなアンプの開発依頼を受ける．同社の社長ロイ・ホールによってOBH-8と名付けられた製品は，その後シリーズ化され，フォノイコライザーやD/Aコンバーターなどを含むラインアップとして現在まで引き継がれている．コンパクトなOBHシリーズがそれである．

1997年には大ヒットとなった43シリーズと，その上級の52シリーズがリリースされる．翌年これらの製品は，米国Stereophile誌，英国What Hi-Fi誌などの賞を受賞し，またフランスのディアパソンドール賞も受けている．以後クリークは，これら欧米でのオーディオ賞の常連となっていった．

生産量が増えるに連れ現在の設備では間に合わなくなり，この年，基板の製造を任せていた契約企業のあるケントへ移転する．設備を作るのではなく，設備のあるところへ会社ごと移ってしまったわけだ．

翌年マイクは，独自にEPOSというスピーカーブランドを作っている．これは，わが国には輸入されていないようだ．

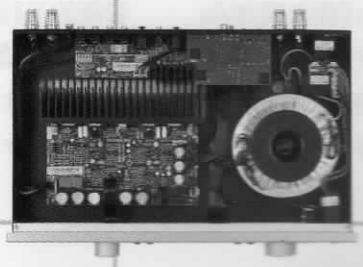
この後，わが国でも人気にあったアンプ5350SEなどが発売されるが，2003年から50シリーズのデザインはブラックから現在のシルバーに変わっている．そして2005年には，同社の史上最も野心的と言われる上級モデルDestinyシリーズが発売になる．その位置づけは，現在でも変わらない．

このころからパーツや人件費などのコスト上昇が目覚ましくなる．製品価格も上がり，本来のポリシーである低価格でハイクオリティという理念を貫くのが難しくなってきた．熟慮の末，マイクは中国での生産を決意する．入念なリサーチの末，信頼のおける現地企業を見つけ，自社の設計や品質管理のスタッフを送り込んでの生産となった．こうしてでき上がったのがEvolutionシリーズである．

クリークのコンペティターは多かったが，ハイエンド市場へ移行したもの，AVなどマルチチャンネルへ方向を変えたもの，あるいは消滅したものなど，現在まで当初のままで続いているブランドは少ない．そのなかで2チャンネル市場に留まり続け，低価格でハイクオリティという正統的な英国オーディオを継承しているクリークの存在価値は大きい．それは，今後もますます貴重なものとなっていくに違いない．

EVOLUTION 50A
プリメインアンプ

EVOLUTION 50A
プリメインアンプとペアをなす
CDプレーヤー，EVOLUTION 50CD



トロイダル型
電源トランスを搭載した
EVOLUTION 50A
プリメインアンプの内部